

佐賀短期大学におけるサークル活動の現状と課題； 学友会剣道部の活動報告を中心に

池田 孝博

(佐賀短期大学 幼児保育学科)

(平成20年 2 月29日受理)

**The Present Condition and Issue on Group Activities in Saga Junior College;
The Report of the KENDO Club in the Schoolmate Society**

Takahiro IKEDA

(*Department of early childhood education and care, Saga junior college*)

(Accepted February 29, 2008)

Abstract

The purpose of this report is to show the content on activity of Kendo club from 1997 to 2007. The problem of the club activity is arranged according to the report of the result of 11 years in Nishi-kyushu University and Saga junior college. The problem was arranged to the following; 1)activity (practice), 2)facilities, 3)student's motivation and 4)graduate's cooperation. I wish that this material will be useful to think about the sports club in that university and junior college.

Key words : 大学生 運動部

1. はじめに

大学・短期大学におけるスポーツ・運動系のサークル活動は、様々な部分で高等学校までのスタイルと異なっている。たとえば教員が顧問となって指導されることが多い中等教育の部活と比較すると、大学・短期大学のサークルの活動スタイルは一樣ではない。監督など専門的指導者と競技志向の選手集団から形成される体育会から学生の自主性によって仲間づくり、レクリエーションを目的として活動する団体まで、その組織形態も様々である。しかしこれらの活動は、いずれも学生の目的意識と組織の方針が合致することを前提として、その活動が成り立っているという点においては共通性を有すると思われる。

さて近年は少子化の影響で、オープンキャンパスや学校見学会により、大学・短期大学において盛んに学生獲得のための募集活動が行われている。本学もその例外ではないが、オープンキャンパスに参加する高校生は、学内のサークル活動にも大きな関心を寄せていることが、参加者アンケートなどに示されている。自分が進学を希望する大学・短期大学にどのようなサークルがあるのか、さらにそれらがどのような活動を行っているのかは、高校生の重要な関心事である。学生の本分の学業としてどのような内容が学べるか、どのような資格が取得できるか、どのような職業に就けるかという問題と同様に、サークル活動も高校生の進路決定の決め手の一つになっている。つまり、サークル活動は学生生活を充実したものにするか否かに大きく関与しているといっても過言ではない。

また少子化問題は「大学全入時代」の生き残りをかけた経営戦略としてサークルを利用することにも波及しており、近年とみに顕著な「スポーツによる大学アピール」を疑問視する報告もある(中川ほか,2007)。

この小論では、本学学友会の運動部サークルのひとつである剣道部の平成9年度から19年度までの活動内容や成果を報告し、そこに生起する課題を整理する。この資料が今後の永原学園の大学・短期大学の学生サークル活動を考えるための一助になれば幸いである。

2. 剣道部の活動状況

2.1 活動スタイル

筆者は、平成9年4月、学生と剣道部の活動を通して関われることに大きな期待をもって着任した。前年度、激戦区の九州学生剣道連盟の代表として個人・団体の両部門において全日本女子学生大会に出場した実績から、学生剣士によってしっかりした活動が行われていると確信していたからである。しかもこの年、九州圏内の有力高校から入学生があることも知らされていた。

しかしながら、4月半ばを過ぎても一向に剣道部の稽古が始まる気配はなく、部員全員が一堂に会して顔合わせをすることすら出来ない状況にあった。後日聞いたところ、当時の剣道部の稽古は基本的に個人の自由意思に任されており、多くの学生は学外に指導者や稽古の場を求め、学内では試合前数週間程しか稽古が行われていなかったらしい。

そこでこの年の秋の幹部交代の時期から学生に活動の目標を設定させ、その目標を実現するための活動内容を検討していった。当初週2日に設定していた稽古日は、拒否反応を示す学生を説き伏せながら毎年1日ずつ増やしていった。

平成11年の秋、他のサークルとの兼ね合いで短大の体育館が使用できなかった木曜日に、佐賀商業高校との合同稽古会を開始した。「木曜会」と称するこの稽古会により、佐賀短大・佐賀商業両校のレベルアップが図られるとともに、佐賀商業から短大に進学する生徒の増加にも繋がった。残念ながら、学内サークル間の時間調整によって木曜日の体育館使用が可能となった平成18年以降木曜会は実施されていない(今シーズンはトレーニングを行っている)。このような毎年の努力を数年間積み上げて、表1に示すように稽古日週5日、トレーニング日・休養日を各1日という1週間の活動スケジュールを確立するに至った。

表1 平成19年度の週間スケジュール

曜日	活動内容	活動場所
月	7:00-8:00 朝稽古 18:00-19:30 稽古	佐賀短大 西九州大 体育館 雨天体操場
火	7:00-8:00 朝稽古 18:00-19:30 稽古	佐賀短大 西九州大 体育館 雨天体操場
水	16:00-17:30 稽古 18:00-19:30 稽古	佐賀短大 西九州大 体育館 雨天体操場
木	17:40-18:30 トレーニング	佐賀県総合運動場
金	18:30-20:00 稽古(合同)	佐賀短大 体育館
土	9:30-11:00 稽古(合同)	佐賀短大 体育館
日	休養日	

佐賀短期大学の剣道部には、特待生制度も専用道場もない。文字通り「ないないづくし」の剣道部である。昨今の学生剣道連盟の中で存在感を示すには学生の自覚と行動が求められる。剣道部の運営には、筆者自身が学生・大学院生としてその活動に参加していた筑波大学、さらに前任校である慶應義塾(H4.4-H9.3、中等部教諭)の体育会剣道部での経験と、歴史と伝統を有する多くの

他大学との交流が齎す影響に依っている。これらをいわばクラブ作りのお手本として、本学なりの剣道部の活動スタイルを模索していった。特に久留米信愛女学院短期大学の剣道部には、本学剣道部の基礎づくりの過程で学ぶことが多かった。

平成15年度より、同じ永原学園内の西九州大学と合同での活動を開始し、「永原学園大学」の名称で統一チームの学連登録が認められた。これには西九州大学の剣道部の指導にあっていた教員の退職を受け、活動を引き継ぐかたちで実現したという経緯がある。4年生までの部員が揃うことで、短大に少ない男子部員と大学に少ない女子部員に大会出場の機会を提供できること、短大の2年サイクルのチームづくりでは難しかった良き伝統の継承が可能になるという2つのメリットが期待された。なお平成19年度の剣道部の年間スケジュールは表2に示す通りである。

表2 平成19年度の年間スケジュール

月	活動内容	開催地
4	学生剣道連盟登録	
5	遠征・練習試合 全九州学生剣道選手権大会（個人） 西日本学生剣道大会	九州圏内 福岡 福岡
6	西九州学生剣道大会	佐賀・長崎（隔年）
7	福岡旗争奪佐賀県女子剣道大会 久留米地区学生剣道大会 全日本学生選手権大会（個人）	旧川副町 久留米市 東京・大阪（隔年）
8	夏季強化練習 遠征・練習試合	学内 九州圏内
9	全九州学生剣道大会（団体）	福岡
10	全日本学生剣道優勝大会（団体）	東京・大阪（隔年）
11	全日本女子学生剣道優勝大会（団体）	愛知
12	九州地区大学体育冬季大会（剣道競技の部）	九州各県持ち回り
1		
2	卒業生送別会	
3	春季合宿	佐賀県内

2. 2 部員

年度ごとの入学部員および主将名（短大のみ）を表3に示している。部員の確保には後述する本学の入学試験制度が影響していることは言うまでもない。これを利用して各高等学校への訪問、大会への視察および指導者との面会などを繰り返し、募集広報活動を行った。また徐々に積み上げられる実績が目目されるようになり、毎年コンスタントに部員が確保できるようになった。

部員の確保は、ある意味において学校全体の学生募集

にも波及効果を及ぼした。本学剣道部を希望して志願する学生の存在によって、新たな高校とのつながりが生まれるようになった。地味ながら「経営戦略としてのスポーツによる大学アピール」が果たせたと考えている。

部員の中には高校時代、全国大会に出場した経験を有するような競技力レベルの高い学生が含まれるようになった。またその一方で、高校時代の実績はなくても剣道が心から好きで、短期大学でも続けていきたいという学生も含まれていた。さらに将来を嘱望されるような素晴らしい素質を有しながら、高校時代は大怪我や故障により競技生活を棒に振ったにも関わらず、本学に入学して剣道部で活動し、全国大会出場のための大きな原動力となった学生も数名いる。

このように様々なレベルの学生部員それぞれが満足して活動できるような配慮も課題となる。そこで上級生の中から互選により幹部として主将、副将、主務および会計を選出させ、可能な限り学生の自主性に基づいて部の運営にあたらせた。主将には学生部員の代表として、指導者との稽古内容の検討・選手選考などの協議をできるだけ対等な立場で行うように努力した。副将は主将の補佐として、主将不在時にその代行にあたらせ、主務・会計には部の運営のためのマネジメントを行わせた。各幹部の学生は自分の役職を遂行するにあたり、さまざまな障壁に直面しながらもそれらの克服に努力し、人間的に成長していったと感じている。

2. 3 指導者

学内に剣道経験のある指導者が不在であった平成9年以前は、学校当局の計らいにより佐賀県警剣道術科師範・剣道教士八段（平成18年、範士）三宮一宏先生を学外指導者としてお迎えしていた。ただこのように著名な先生にご指導いただける光栄を当時の学生たちがどの程度理解していたのかは定かではない。

筆者の着任と時期を同じくして三宮先生は県警をご退職され、佐賀県剣道連盟理事長に就任された。学内に指導ができる教員がいることから、外部の先生を招聘することに学校の理解が得られなくなったことに加え、三宮先生ご自身も連盟の業務に専念されたため、これ以降本学剣道部が先生のご指導を仰ぐ機会はなく、筆者としても誠に残念な思いであった。

学生の稽古には外部の先生も多く参加され、筆者や学生は稽古をつけて頂く機会に恵まれた。その中でも特筆すべきは、元三養基高校剣道部監督で、現在は佐賀北高校にご勤務されている秋吉祐二先生（教士七段）のご指導が受けられたことである。当時、秋吉先生は佐賀県総合運動場にお勤めで、現在の佐賀北高校に転勤されるまでの間、本学体育館で我々とともに汗を流された。先に紹介した佐賀商業との合同稽古（木曜会）は、秋吉先生のご提案で実現したものである。佐賀商業の剣道部顧問

をされている城ヶ崎郁剛先生（錬士六段）は、秋吉先生の三養基高校時代の教え子であった。豊富な経験に裏付けられたご指導により、学生は勿論、筆者の指導者としての向上、さらに数多くの高校・大学剣道部と交流が実現した。

また佐賀県選出の衆議院議員・福岡資磨氏（五段）も当選前の数年間、県内での社会活動の一環として本学のコーチを務め、学生たちと剣を交えられた。福岡資磨氏は筆者が慶應義塾中等部に教諭として勤務していた時期の、慶應義塾大学剣道部員であり、共に稽古に汗した仲間である。同氏には剣道の指導だけではなく、学生がさまざまな社会活動に参加できる機会を提供していただいた。

現在は木曜日に行っている佐賀県総合運動場でのトレーニングの指導は、本学職員で陸上部監督の福岡和憲先生にお願いしている。このトレーニングでは、ランニングを中心としたメニューによる足腰の強化や、剣道以外の運動によるリフレッシュを目的としている。さらに筆者とは違う視点で学生たちを観察してもらうという面でも効果を挙げている。日常の剣道の稽古とは違う場面で、別の指導者から指導を受ける際の学生の反応は様々である。陸上部の指導で多忙であるにも関わらず、トレーニング指導を通していただいた福岡先生の学生観察があつてこそ、各々の学生の人間性をさらに深く理解し、剣道部の活動にフィードバックしていくことができたと考えている。

2. 4 活動実績

部員の確保、活動内容の充実が進む一方で、出場する大会において納得のいく成果があがらないシーズンが数年続いた。高校のトップ選手は関東や関西に抜けていくとはいえ、剣道王国九州では大学生のレベルも高いといえる。女子では夏の個人戦が8名、秋の団体戦は6校に九州代表の全日本学生大会出場枠が設けられている。しかし鹿屋体育大学、福岡教育大学、福岡大学などスポーツ専門の学部や課程を有する大学、私学の伝統校、特待生制度によって選手勧誘を行う大学などが犇めき合う中、2年の短期大学でその枠内に席を確保することは至難の業であった。

平成11年度の秋の団体戦において、本学は西日本学生大会2位の福岡大学と1回戦で対戦した。そして臆することなく相手のポイントゲッターを抑えて勝利した。優勝候補の福岡大学が無名の本学に1回戦で敗退したことに騒然となった会場の様子と、監督席で経験した顔から血の気が引いていく感覚を今でも鮮明に覚えている。しかしその後の2回戦で佐賀大学に惜敗し、この年は悲願の全日本出場を逸した。

翌平成12年、県内の川副町（現、佐賀市）において福岡旗争奪佐賀県女子剣道大会が開催された。国内すべて

の女性剣士が覇を競う、国内最高の個人戦である全日本女子剣道選手権大会の予選を兼ねた一般女子の部において主将の岡智亜紀が見事優勝し、佐賀県代表として出場権を獲得した。快挙ともいえる成果であるが、その全日本女子剣道選手権大会（名古屋市にて開催）と、女子学生の全国大会（団体戦）の予選である全九州女子学生剣道大会は奇しくも同日開催となる。団体全日本出場を目標に1年間努力してきたチームが、エース不在で予選を戦うことを余儀なくされたわけである。しかしそのことが逆に部員一人ひとりの危機意識として自覚につながり、前年の雪辱を果たして見事3位入賞を果たした。筆者が就任以来初となる全日本学生大会出場権の獲得である。翌平成13年も2年連続となる3位入賞、全日本学生大会でも2回戦に進出した。これ以降、全国大会には平成15年、19年に出場している。

大会以外の対外活動としては試合前の遠征（練習試合）がある。基本的には日帰り可能な九州圏内が中心で、これまで交流があった大学は、志學館大学（鹿児島）、熊本大学、熊本学園大学、久留米大学、西南学院大学、福岡大学、福岡教育大学、九州産業大学、九州国際大学などである。また夏には遠方より九州を訪れる関東関西の有力校の夏季合宿に参加し強化を図った。平成12年には熊本県菊池市にて筑波大学、福岡市にて天理大学、13年は別府市にて大阪体育大学と交剣し、流汗の行を共にした。また平成10年には久留米市で、平成16年は松山市でそれぞれ行われていた島根大学・香川大学・大阪教育大学（平成16年はこの他、富山大学・聖カタリナ大学・浜松大学）などによる各地区有力校の連合合宿に参加し、多くの学剣士との交流にも努めた。

3. 短期大学の支援体制

3. 1 入学試験制度等

部員確保のための大きな要因は、入学試験制度にある。短期大学で剣道部のスポーツ推薦を行っている学校はそれほど多くはない。この点を特徴として、短期大学で剣道をしたいと考えている高校生の受け入れに力を注いだ。近年ではアドミッション・オフィス（AO）入試の導入に伴い、スポーツでもAO入試も導入している。従来のスポーツ推薦入試では、選考の過程で学生と部活の指導者が面接などで関わるのが出来なかったが、この制度により志願する学科の教員と運動部指導者との面談が義務付けられ、選考過程で受験生の目的意識を確認したり、本学運動部の活動スタイルを事前に周知したりすることが可能になった。

しかし、全国的に女子学生剣道に力を注ぐ大学・短大は急増した。教育学部を有する国立大学や有名私立大学によるスポーツ推薦の導入によって、高校時代の部活動

の実績を利用した受験が可能になっている。また同じ短期大学でも、近いところで別府大学短期大学部、愛媛女子短期大学などが大きな経済的支援を盛り込んだ入試制度を導入し、短期大学で剣道を希望する高校生の獲得に熱心に取り組んでいる。このような状況を背景として、本学に対しても高校の先生や保護者からの経済的支援に関する問い合わせは必ずある。中には実情を聞いて別の学校に進路を変えられてしまったケースもある。

本学における運動部に入部を希望する受験生への経済的支援としては、永原学園奨学金で特例的に認められている「佐賀短期大学において特技を有する者」をスポーツAO入試で志願した者に適用している。支給の基準となる実績としては、予選を勝ち抜き、各都道府県の代表として九州大会などの地区大会、あるいは全国大会に出場経験を有する者について、学業成績（評定平均値）を加味して審査を行うシステムで運用している。

試験制度のみで学生を確保することは年々難しくなっていると感じている。

3. 2 活動に対する支援

活動に関わる経費は基本的に運動部・文化部すべてのサークルを統合する学友会の予算から賄われている。事務分掌は学生課が担当し、学友会の規定に則って連盟への登録料、大会参加費、交通費、備品・消耗品購入のための援助がなされている。ただ部員数が多く、学生連盟への登録料も高額な剣道部は、学友会の予算を圧迫するという理由から、活動経費の一部について短大の一般会計に予算申請を行っている。これらのことを考えると経済的な面での活動支援体制は恵まれた環境にあるといえる。

しかしながら、活動や成果に関する評価の体制については十分とは言えない。本学で平成13年2月、平成14年10月、平成17年6月と三度にわたり『自己点検・評価報告書』が作成されているが、それらのサークル活動に関する項には剣道部の名称と人数が、他の部活と同様に列記されているのみで、この時期に残した九州大会上位入賞や全国大会出場という学生たちの努力の成果は全く触れられていない。平成16年度末、規定改正に伴って学長賞の公募が行われたが、前年全国大会に出場した剣道部は担当部課から推薦されず、自薦で受賞するに至った経緯もある。2002年度の同書に、「サークル活動は不活発である」と評されているのみで、他の報告書には活動内容を評価・検討する文言すら見ることはできない。

このように学校としての、サークル活動支援の体制は予算配分など経済的支援については規定・制度が整えられているといえる。しかし、それぞれの活動の内容についての問題点や改善点を検討したり、活動の成果を評価したりするシステムの構築には残念ながら至っていない。これが「サークル活動の主体は学生であり、その内容に

学校は関与しない」という信念に基づくのかどうかは定かではない。ただ昨今の学生気質を考えれば、「経済的に支援しているのに活性化しない」の一言で済ませられるのか疑問である。もう少し活動の中身に関わって支援する必要があるだろうか。

4. 活動上の諸問題

4. 1 活動（練習）について

現在の剣道部の活動における課題は、まず時間的な問題である。短期大学はもちろん、合同で活動を行っている西九州大学も、大学としては多忙な学生生活を送っているように感じられる。両大学とも資格取得や地域貢献・地域交流のための活動が盛んであり、運動部に不可欠な練習時間を確保することが難しい。特に2つの学校が1つのチームとしての合同稽古を行う上で、地理的な条件は大きな障壁となっている。かろうじて金曜日と土曜日にその時間を確保しているが、金曜日は17:40の講義終了後に車で移動してくる西九州大生の到着を待つ関係で、17:20に5時間目が終了する短期大学の学生は18:30まで練習開始を待たなければならない。

また一般的な大学剣道部は、長期休暇中に強化合宿や遠征を行っている。しかしながら、西九州大学も佐賀短期大学も資格取得のための実習期間に組み込まれ、剣道部の活動に制約がかかることが多い。学生の本分は勉学であり、資格の取得、優れた職能の修得であることから考えれば、これは致し方ないことである。与えられた条件の中で効果的に稽古に取り組めるよう努力している。

4. 2 施設について

金曜日と土曜日を除けば、西九州大学は雨天体操場で、佐賀短期大学は体育館で活動を行っている。いずれの施設も他のサークルとの共同使用であるため、練習日・時間の確保が難しい。多くの大学・短期大学であれば剣道場（武道場）が設置されているが、永原学園内には武道場はおろか、剣道部で専用できる施設は存在しない。

4. 3 学生の取り組み

次に学生の活動へのモチベーションの問題について考えたい。着任当初は短大に入学してくる学生の剣道に対する意識改革に力を注がなければならなかったように思う。大学生として真剣に剣道に取り組みたければ進学できる大学は数多くある。そのような中で短期大学に進学する学生に、剣道への取り組みに対して強い意志を求めることは難しいと感じられた。ささやかながら実績が積み重ねられるに連れて、「佐賀短大で剣道をしたい」という意志を持って学生が入部してくれるようになったが、スポーツAO入試で入学する学生とそうでない学生、あるいは佐賀短大生と西九州大生の意識の温度差を埋めることは大きな課題であると感じている。

さらにここ数年の佐賀県の中学生、高校生の活躍は全国的に見ても華々しい。そこで脚光を浴びた生徒たちは、関東、関西の大学に進学し、大学生としても素晴らしい活躍を収めている。本学の学生たちは小さい頃からそのような選手とチームを組んだり、対戦したりしたことがあるものが多い。残念なことに、それを物差しにして学生が自分の力を過信してしまう場合がある。これを「ハロー効果」と呼べるかどうか定かではないが、謙虚に自分の実力を認識できなくなっている。「井の中の蛙、大海を知らず」で、指導者や先輩のアドバイスを拒絶し、自分の考えや経験こそが唯一絶対と考えて行動するため、組織としての活動に支障をきたす場合がある。筆者も尊敬する、ある大学の指導者が、「小学生の道場剣道から脱却できていない九州の学生剣士」と求める意識の低さを評された言葉が印象に残っている。

学生剣道界は向上心なくして勝ち抜けるほど甘い世界ではない。勝ち上がるには「高校剣道から質的変換」が求められる。優れた実績と質の高い活動内容を評価されるような4年制の大学ですら、その課題が達成できたかを真剣に問いながら取り組んでいる(神崎,1998)。自ら道を求めることなく、剣道の実践はありえない。またそれが良い意味での体育会的体質であり、あまり剣道がレクリエーション・サークルとして存在しにくい背景にもなっている。

このような課題の解決策として、筆者は自分自身の剣道への取り組みを学生たちに示すことを心がけ、それを実践してきたつもりである。「師弟同行」という言葉がある。「武道の教師は生徒と同じく道を求め、道の実現を目指す修行者」(中林,1987)である。筆者の知る限り、素晴らしい指導者は、ひとりの修行者としても剣道に向き合い、自らも向上を求め、学生とも直接剣を交えて汗を流している。残念ながら筆者の場合は、卓越した技能や指導の技術、戦術、その気にさせる人心掌握術など何も持ち合わせていないため、実践する以外はなかったと言うのが正直なところであるが、それなりに周囲の高校指導者からは評価されてきたと自負している。

しかしこのような剣道部の活動は、学生にあわせて自らの時間を調整し、稽古に参加する機会を確保しなければならないという前提がある。この前提が崩れたとき、理想とする剣道を学生に求めることには限界が生じる。この限界を感じたとき、別の価値観による剣道部活動への転換という大きな決断が必要である。

4. 4 卒業生(OB・OG)の存在

学生剣道を支援する存在としてのOB・OGについて考えたい。卒業生との関係性は学生剣道において欠かせない。大会の審判や役員、監督としての指導など、各大学において先輩方の活躍の場は多く、逆に卒業生の貢献度がその大学の活躍を支えているといっても過言ではな

い。卒業後の剣道の継続はそれが可能な環境、職業にも左右される。本学の卒業生が、実業団や警察官・教員として剣道を継続することは稀である。限られた職種であっても、永原学園剣道部卒業生の中から、余暇を利用し剣道を継続し、剣道部のみならず学生剣道界にも貢献できる人材が輩出されることを期待したい。

5. おわりに(謝辞に代えて)

昭和50年代に剣道経験のある学生たちによって自主サークルとして発足したとされる本学の剣道部が(全日本学生剣道連盟,2004)、紆余曲折を経て現在のように活発なサークルのひとつとして活動できることには、各時代の部員たちの努力とともに、学内外の多くの先生方のご尽力、さらに本学入学以前に学生たちに良き薫陶を与えてくださった先生方の影響も大きいと感じている。また両大学の関係事務部署やバスの運転手さんなど職員の皆さんにも支えられてこそ今日があると痛感している。このように多くの方々のお力添えとご厚情に対し、この紙面をお借りして厚く感謝の意を表したい。

文 献

- 神崎浩(1998) 高校剣道から大学剣道への質的転換を目指して. 権(大阪体育大学コーチング系) 2:49-53.
中林信二(1987) 武道のすすめ. 中林信二先生遺作集刊行会. pp.158-162.
中川保敬・藤井雅人・満園良一・谷口勇一(2007) これからの大学運動部のあり方について考える. 第56回九州体育・スポーツ学会予稿集: 23.
全日本学生剣道連盟(2004) 五十周年記念誌. p.232.

表3 平成9－19年度の部員数と活動実績の概要

年度	入学部員数（名） ^{注1)}					主将（学科・出身校）	成績		特記事項
	食	生	幼	く	計		九州大会	全国大会	
8	0	2	4	—	6		第3位	1回戦敗退	
9	1	3	0	—	4	藤井清美（幼・佐賀商）	ベスト8	—	池田着任
10	3	4(1)	2	—	9(1)	山下由紀美（生・阿蘇）	1回戦敗退	—	
11	4	5(1)	2	—	11(1)	宮園麻子（生・博多女子）	2回戦敗退	—	
12	2	2	1	—	5	岡智亜紀（食・三養基）	第3位	1回戦敗退	岡、県代表で全日本出場
13	2	2	6	—	10	岩木須美（食・熊本市立） ^{注3)}	第3位	2回戦敗退	
14	1	0	4(1)	—	5(1)	太田巳織（幼・大村）	1回戦敗退	—	
15	2	2	2	—	6	今村梓（幼・尚綱）	ベスト8 敢闘賞	2回戦敗退	西九州大学と合同活動開始 ^{注2)}
16	4	1	3	0	8	木原圭奈子（食・必由館） ^{注3)}	2回戦敗退	—	学長賞受賞
17	4	0	4	2	10	林郁美（幼・必由館）	2回戦敗退	—	
18	1	3(1)	2(1)	0	5(2)	尾崎由季（食・白石）	1回戦敗退	—	
19	2	0	4(1)	0	6(1)	吉富紀恵（生・佐賀商）	ベスト8 敢闘賞	1回戦敗退	学長賞受賞
20						永山京実（幼・龍谷）			

注1) 部員数の（ ）は男子で内数

注2) 学生剣道連盟への登録名称は「永原学園大学」

注3) 「熊本市立」の現在の校名は「必由館」